

関電美浜原発 3号機が再稼働 運転開始 40年超は全国初

加茂謙吾

2021年6月23日 10時15分 朝日新聞デジタル



関西電力の美浜原発3号機=2021年6月20日午前11時29分、福井県美浜町、朝日放送テレビヘリから、矢木隆晴撮影

- -
- 関西電力は23日、運転開始から40年を超える老朽原発の美浜3号機（福井県美浜町）を再稼働した。



2011年の東京電力福島第一原発事故後、原発の運転を原則40年としたルールができ、40年超の原発再稼働は全国で初

老朽原発 再稼働は安か？原子力工学の専門家に聞く

23日午前10時、原子炉内で核分裂の反応を抑える制御棒を引き抜いて起動した。美浜3号機は11年5月から定期検査に入っており、稼働するのは約10年ぶり。今後、工程が順調に進めば、24日未明にも核分裂が安定して続く「臨界」に達し、29日に発送電を始める予定だ。調整運転をしながら出力を上げ、7月27日に営業運転を始める計画。

同社原子力事業本部の近藤佳典・副事業本部長は起動後、記者団に「今後も一つ一つの作業を安全最優先で進めていきたい」と述べた。

「40年ルール、形骸化」懸念の声も

ただ、福島事故後、安全対策などが強化された新規規制基準で義務づけられたテロ対策施設「特定重大事故等対処施設」（特重）が10月25日の

設置期限に間に合わないため、10月23日に定期検査に入って停止する予定で、稼働は4カ月間にとどまる。

13年7月に施行された改正原子炉等規制法では、原発の運転期間を原則40年までと定めた。ただ、新規制基準に適合すれば、1回だけ最長20年間までの延長を認める「例外」規定が盛り込まれている。

国内では今後40年超の原発が増えるため、電力業界などでは美浜3号機の再稼働が原発の長期利用の後押しになるとの見方がある一方、専門家からは「40年超の再稼働が増えれば、福島事故を受けて古い原発をできるだけ減らすという40年ルール趣旨が形骸化しかねない懸念もある」（長崎大の鈴木達治郎教授）との声もあがっている。

美浜3号機と、同じく40年超の高浜原発1、2号機（福井県高浜町）の3基は新規制基準への適合が認められ、福井県の杉本達治知事が4月下旬に再稼働への同意を表明した。新規制基準のもとで稼働した原発は、今回の美浜3号機で6原発10基目になる。一方、高浜1、2号機は6月上旬の特重の設置期限に間に合わず、再稼働を当面先送りしている。

（加茂謙吾）

再稼働「絶対反対」200人デモ

美浜原発3号機、地元財界は歓迎

2021年6月23日 18時53分（共同通信）



関西電力美浜原発3号機（左奥）の再稼働に抗議する人たち＝23日午後、福井県美浜町

運転開始40年超の原発として現行ルール下で初の再稼働をした関西電力美浜原発3号機（福井県美浜町）の周辺には23日、県内外から市民団体などの約200人が集まり、「再稼働、絶対反対」と声を上げて抗議デモを展開した。一方、地元財界関係者は「ほっとした」と歓迎した。

デモ隊は「老朽原発うごかすな」などと書かれた横断幕や旗を掲げ、原発周辺のほか、町役場や関電原子力事業本部の前を行進。関電に、美浜3号機の即時停止と廃炉を求める申し入れ書を提出した。

「負の歴史」残る地元で入り交じる賛否 美浜原発3号機再稼働

大島秀利 毎日新聞 2021/6/23



関西電力美浜原発3号機の起動の様子を映す、中央制御室からのライブ中継画面＝福井県美浜町で2021年6月23日午前10時、山田尚弘撮影

関西電力美浜原発3号機（福井県美浜町）が23日、再稼働した。地元には、多数の死傷者を出した17年前の大事故の記憶が残る。そ

れでも、原発と共に生きてきた事実は重く、不安と期待が入り交じる中、国内初となる「40年超原発」再稼働の日を迎えた。

「墓参りに行くしかない」

美浜3号機には忘れてはならない負の歴史がある。2004年8月、2次冷却系の大きな配管が突然破裂して高温の蒸気が噴出、11人が死傷した事故だ。亡くなったのは関電の協力会社の5人。死亡した亀窟（かめいわ）勝さん（当時30歳）の父章さん（71）＝徳島県吉野川市＝は息子を奪った事故について「怒りはあるが、私のような一般人が3号機を止めてくれというて、止まるもんでもない。せめて教訓を生かしてほしい」と語る。その上で「私自身は息子の墓参りに行くしかない。他に方法があるなら教えてほしい」と無念さをにじませた。他の遺族は取材に対し「話したことは新聞に載せないで」とするなど、複雑な心情がうかがえた。

「二つの不安」があった

「もう美浜3号機は動かないと思っていた」。



反原発の立場を貫く美浜町議の松下照幸さん（73）も戸惑いを隠せない。

再稼働した関西電力美浜原発3号機（手前）＝福井県美浜町で2021年6月23日午前10時40分、本社へリから

蒸気噴出事故を契機に町民の原発を見る目が変わり、さらに11年の東京電力福島第1原発事故で安全神話が崩壊すると、「反対派」として敬遠されがちだった自分に多くの町民が声をかけてくるようになった。その後、美浜1、2号機は廃炉に。3号機も安全対策でコストがかかり、使用済み核燃料の処分などの問題も残り、再稼働は難しいと考えていたのだ。

だが、関電は15年に運転期間の20年延長を申請し、国も認可した。

「この10年間、動かないことは事故も起きないことを意味した。この地震大国では『老朽原発』の再稼働でリスクがいよいよ高まってくる」

原発が「あること」と「なくなること」。町民の間には、この二つの不安があったと、松下さんは言う。「『今』だけを考えると、再稼働することで町には固定資産税や交付金が入り、関係する人には仕事が戻ってくるが、全町民のためにはならない。世界的に原発の時代は終わり、3号機もいずれ運転延長期間が終了する。その前に再生可能エネルギーなどで地域の中でお金が循環する未来をつくりたい」。思いは切実だ。

「待ち望んでいた」の声も

一方、同原発が立地する美浜町丹生地区の元区長で関電の元協力会社社員の庄山静夫さん（68）は「あの事故は、定期検査の短縮などで、配管の検査をちゃんとしていなかった関電の怠慢だった」と振り返りつつ、再稼働には「あれから関電はずいぶん反省して今は信頼できるし、設備的に問題ないと思う」と話す。10年間、3号機が停止していたことを「炉型が違う福島第1原発事故のとばっちりだ」とし、「この地区では原発作業員を受け入れる民宿もあるし、原発が動き、活発になってほしいと多くの人が待ち望んでいた」と胸をなでおろした。【大島秀利】